

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 25 号, 2022 年, 抜刷 (pp.27-39)

<調査研究速報>

ペルー北部中央山地ワヌコ盆地、
紀元前二千年紀の遺跡分布の再検討

金崎由布子 (東京大学)

A Reconsideration of the Second Millennium B.C. Site Distribution in the Huánuco Basin,
North-Central Peru

Yuko Kanezaki (The University of Tokyo)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

<調査研究速報>

ペルー北部中央山地ワヌコ盆地、 紀元前二千年紀の遺跡分布の再検討

金崎由布子
(東京大学)

1. イントロダクション

ワヌコ盆地は、ペルー北部中央山地の東斜面に位置する標高 2000m 程の山間盆地である。本研究は、近年の調査から新たに構築された当地域の紀元前二千年紀の編年をもとに、遺跡分布の通時的变化を再検討し、当地域の約一千年間のセトルメント・パターンの変容プロセスを考察するものである。

ワヌコ盆地では、1960 年代に東京大学アンデス調査団による考古学調査が行われ、アンデス文明形成期（前 3000-後 1 年）および地方発展期（後 1 年〜）の文化の様相が明らかにされた。調査の中心となったコトシュ遺跡では、長期間にわたる建築遺構の積層が明らかになり、この成果に基づいて地域の編年が 6 時期（形成期の 5 時期と地方発展期の 1 時期）に区分された [Izumi and Terada 1972]。この編年は当時としては画期的なものであり、その後の形成期の広域編年（早期・前期・中期・後期・末期の 5 時期区分）の基盤となった [cf. 加藤 1998:38; Onuki 1999]。しかしながら、他地域の研究の蓄積が進む中で、当地域ではその後しばらく考古学調査が途絶えており、今後の研究の基盤となる高精度編年構築のための新たな調査研究が求められていた。

当地域では 2000 年代に入って日本人調査者による考古学調査が再開された。2001 年にはセトルメント・パターン調査が行われ、盆地内の各時期の遺跡分布が明らかになった [井口ほか 2002; Matsumoto 2020b]。その翌年には、1960 年代に小規模な発掘が行われていた盆地北部のサハラバタク遺跡の再発掘調査が行われた [井口ほか 2003; Matsumoto and Tsurumi 2011]。この調査では、形成期後期・末期の建築遺構が検出され、AMS 法による放射性炭素年代測定データを含む新たなデータが得られた。

2016 年から、鶴見英成らによるワヌコ盆地の再調査が開始された [鶴見・サラ 2016]。この調査は、地域編年の高精度化を研究の主軸の一つとしており、精緻な層位発掘とともに、AMS 年代測定による多量の放射性炭素年代データが得られた。また、「もう一つのコトシュ」と言われるハンカオ遺跡の調査では、4m におよぶ紀元前二千年紀の堆積が検出され、詳細な型式学的分析が可能となった。その結果、形成期前期にあたりとされてきたワイラヒルカ期が 5 時期に細分され、その後半は形成期中期の前半に当たることが明らかになった [Kanezaki et al. 2021]。さらに、3 シーズンで終了した上記の調査プロジェクトののち、筆者らによる同地域のビチャイコ遺跡の発掘調査が 2019 年に行われた [Depaz et al. 2020]。この調査ではワイラヒルカ期の建築遺構が発見され、そこで得られた土器と年代測定値はこの時期細分と矛盾しないものだった。

本研究では、この新たな編年を用いて、ワヌコ盆地の紀元前二千年紀の遺跡分布を再検討する。近年出版され

た松本雄一による書籍『Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru (ワリャガ川上流域における先史セトルメント・パターン)』[Matsumoto 2020b]では、各遺跡から表面採集された土器タイプのリストとともに、各時期の遺跡分布が示された。本研究では、このうち形成期前期(ワイラヒルカ期)として提示された遺跡のデータを新たな編年に基づいて再検討し、紀元前二千年紀のより詳細な遺跡分布の推移を明らかにする。また、それをもとに当地域の前二千年紀のセトルメント・パターンの変容プロセスを再考する。

2. 新たな編年の概要

2-1. 先行研究の編年の問題点

ワヌコ盆地ワイラヒルカ期の新たな編年は、近年別稿にて論じている[Kanezaki et al. 2021]。本稿ではその概要を示す。はじめに、先行研究の編年の問題を概観する。

上述のようにワヌコ盆地の地域編年は、これまで6時期に区分されていた。それぞれの時期の暦年代は、1960年代に測定された放射性炭素年代測定値をもとに、当初はミト期(形成期早期)が前2000-前1500年、ワイラヒルカ期(前期)が前1500-前1000年、コトシュ期(中期)が前1000-前800年…のように設定されていた[Izumi and Terada 1972:307-312]。この年代は未校正の年代(測定値から1950年を引いたもの)をもとに決められたものであったため、後に見直しが行われ、近年の書籍ではそれぞれ前2500-前1600年、前1600年-前1200年、前1200年-前700年のように改められている[Matsumoto 2020a]。しかし、この年代も元となるのが1960年代に測定された資料であることには変わりなく、当時の測定技術の問題から、その精度にはどうしても限界があった。また、各サンプルの採取コンテキストが明示されていないため、各時期の年代のばらつきについての解釈も困難であった。そのため、これらの年代はあくまで大まかな目安としての機能にとどまることとなり、現在の技術を用いた年代測定にもとづく新たな編年が求められていた[松本 2010:19-20; Matsumoto 2020a:147; Onuki 2014:119-120]。また、長期にわたって当地域の研究が途絶える中、形成期前期・中期の各地の編年は、相対編年(型式編年)においても前半・後半のように細分が進みつつある[e.g. Tsurumi 2008]。したがって、これらの地域と比較可能な精度で当地域の社会動態を明らかにするために、型式編年、絶対年代の双方の観点から、編年を精緻化する必要が生じていた。

2-2. 本稿で用いる編年

2017年に行われたハンカオ遺跡の発掘調査では、ワヌコ盆地の紀元前二千年紀の編年を刷新する突破口が開かれた[Kanezaki et al. 2021]。この遺跡は、形成期早期から利用されたと考えられるマウンド遺跡であり、4mに及ぶワイラヒルカ期の堆積が発見された。この堆積は、層位、土器、年代によって5時期に区分され、各時期は古い方からワイラヒルカI期～V期(以後WJ-I, II期等と称する)と命名された。各時期の土器は明瞭に異なっていた(図1)。WJ-I期の土器は、無文で表面調整の粗い土器であり、器形は無頸壺または無頸壺状の鉢のみであった。WJ-II期からは有文の土器が登場した。この時期の土器は黒、褐色～明褐色を呈し、刺突文列や短線列などの比較的単純な模様が施された。器形は無頸壺のほか、垂直鉢や閉口鉢が出現した。WJ-III期の土器は、WJ-II期の土器とよく似ているが、より複雑な文様が現れた。また、一部の土器に赤色スリップが用いられ始めるのもこの時期であった。WJ-IV期になると、土器の様相が大きく変化し、無頸壺と鉢とで文様・装飾技法が分化した。鉢に卓越するのは、Zoned Hachureと呼ばれる技法であった。これは刻線で作られた帯や方形などの区画内を、細かい斜線で充填し、焼成後に顔料を塗り込めるものである。WJ-V期はWJ-IV期と多くの点で共通

しており、主な違いは、無頸壺が無文化することと、器壁の外反する鉢類が出現することであった。

また、WJ-I 期から V 期までの各時期に与えられた年代は、WJ-I 期が前 18 世紀半ばから前 17 世紀前半、WJ-II 期が前 16 世紀半ばから前 15 世紀前半、WJ-III 期が前 15 世紀後半から前 14 世紀前半、WJ-IV 期が前 14 世紀半ば後半から前 13 世紀後半、WJ-V 期が前 12 世紀半ばから前 11 世紀半ばである [方法の詳細は Kanezaki et al. 2021 を参照]。このように、ハンカオ遺跡の編年では、従来「ワイラヒルカ期」とひとまとめにされていた時期が 5 時期に区分され、各時期の期間は 100~150 年程度にまで細分された。

ただしこれらの時期区分は、あくまでハンカオ遺跡の層位堆積状況をもとに決定されたものであり、ワヌコ盆地全体の編年としてそのまま用いることはできない。各時期は確かに地域全体に広がる土器のスタイルによって区別されているが、時期の「境界」を定めているのは、一遺跡の建築活動上の画期とされるものである。更には言えば、このような画期は遺跡内で発掘区として設定された限られた区域において見出されたものであり、その変化のタイミングは必ずしも遺跡全体で共通しているとは限らない。例えば、上記の時期区分では、WJ-I 期と II 期の間に時間間隙が見られる。これは当時期に何らかの理由で当遺跡のある地点（現在の遺存状況によりたまたま発掘区として設定されることとなった地点）における利用が停止した、あるいは、少なくとも土器と炭の排出を伴う活動が停止したことを示していると考えられるが、これをそのまま遺跡全体の機能の停止や、地域全体での歴史的空白として捉えることはできない。このように、一遺跡の限られた地点での建築活動にもとづく編年を地域の「マスターシークエンス」[Rowe 1962] として用いることは、各遺跡の利用に関する多様な時間性を、一律なものに還元してしまうことにつながる [Kubler 1970; Sayre 2018 を参照]。

本来的には、地域の遺跡分布の推移を理解するためには、各遺跡を発掘して遺跡ごとに利用の詳細を解明し、それらを比較検討することが必要である。しかし、そのような方法は研究の現状を鑑みるに現実的ではない。そこで本稿では、遺跡分布の推移の傾向を把握するための暫定的な時期区分を設定する。ここで用いるのは、ワイラヒルカ期前葉、中葉、後葉という 3 時期区分であり、前葉はハンカオ遺跡の WJ-I 期、中葉は WJ-II,III 期、後葉は WJ-IV,V 期の土器に類する土器が見られる時期として定義する。これらのおよその年代は、ワイラヒルカ期前葉が前 18 世紀から前 17 世紀頃、ワイラヒルカ期中葉が前 16 世紀から前 14 世紀頃、ワイラヒルカ期後葉が前 13 世紀頃から前 11 世紀頃ある。なお、これに伴ってミト期の終了年代は前 19 世紀末~前 18 世紀初頭に繰り上げられ、コトシュ期の開始年代は前 10 世紀初頭に繰り下げられる。ただし、繰り返すがこの編年は本研究の目的に則した暫定的なものであり、これを各遺跡の利用の開始・終了の年代や、各土器タイプの存続年代として理解しているわけではないことに留意されたい。

以上を踏まえ、次章では先行研究のデータの再解釈をもとに、紀元前二千年紀の遺跡分布の再検討を行う。

3. 紀元前二千年紀の各時期の遺跡分布

3-1. 対象遺跡と分析方法

上述のように、本研究では先行研究に記載されたワイラヒルカ期の遺跡を対象とし、出土・表面採集土器から時期細分を行う。対象となる遺跡は、表 1 に示された 16 のマウンド遺跡である。これらの遺跡は、ヒルカンエラ遺跡をのぞいて全てユンガ地帯に位置しており、立地は河川合流地点付近の沖積地と、河川沿いの丘陵・斜面地帯の二つに大別される。また後者に比べ前者は概して遺跡規模が大きい [井口ほか 2002]。また、表 1 のうち、上から 6 つまでの遺跡はこれまで発掘調査が行われた遺跡、7 つめ以下は踏査により表採資料のみが得られている遺跡である。

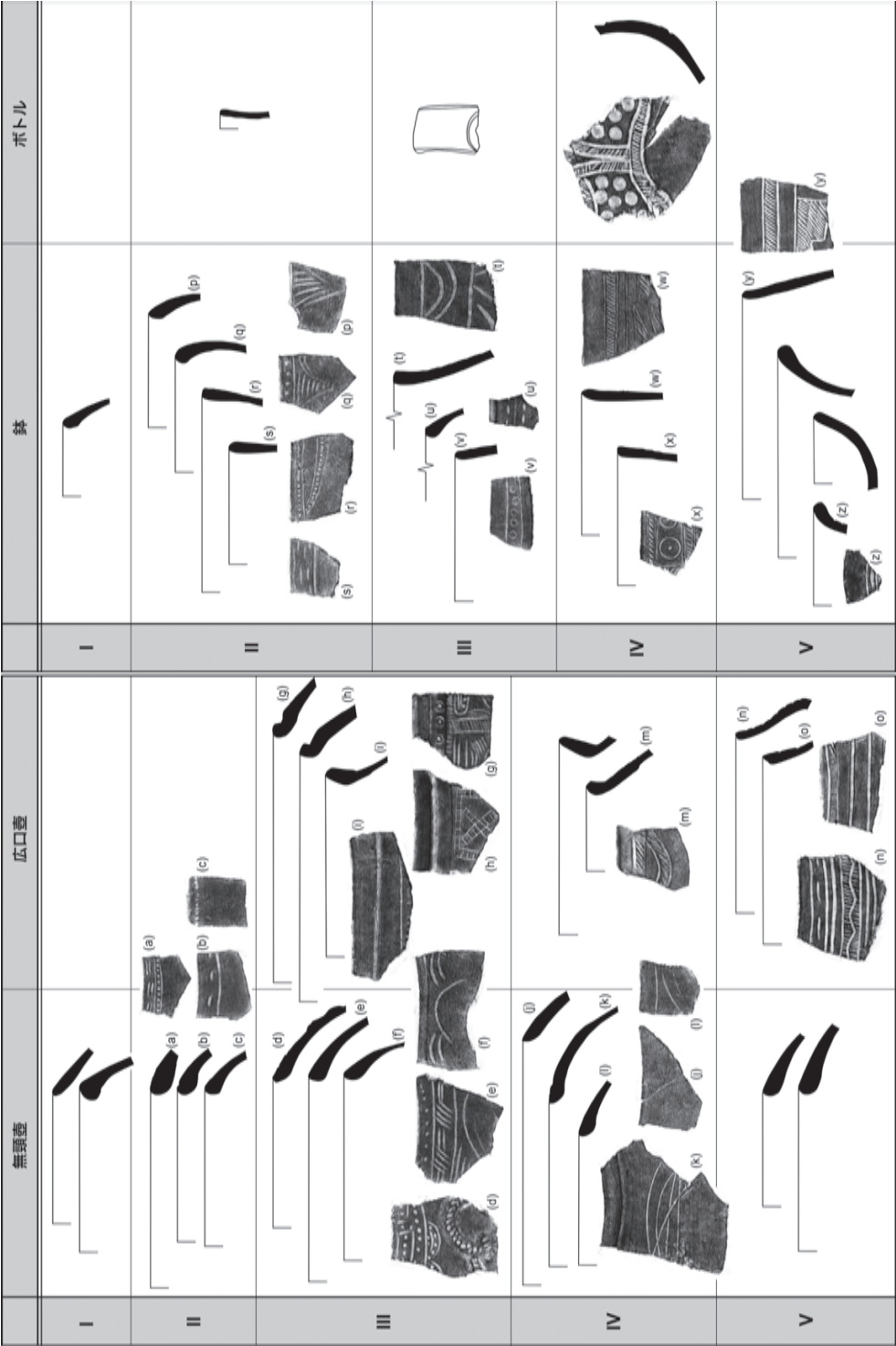


図1 ハンカオ遺跡の各時期の土器 [Kanezaki et al. 2021:fig.3-4 より一部改変]

表 1 本研究で言及する遺跡の概要

番号	遺跡名	標高	立地	文献
6	ビチャイコト	2047m	ユンガ 丘陵上	金崎 2021
24	コトシュ	1930m	ユンガ 沖積地	Izumi and Terada 1972
26	シヤコト	1840m	ユンガ 沖積地	Izumi et al. 1972
27	ハンカオ	1925m	ユンガ 沖積地	Kanezaki et al. 2021
43	ワイラヒルカ	1970m	ユンガ 丘陵上	Onuki and Matsumoto 2020
44	ビギミナ	1779m	ユンガ 沖積地	Tsurumi et al. 2020
10	ションゴイマラン	2194m	ユンガ 斜面上	Matsumoto 2020b
20	カイワイナ・ノハ	1967m	ユンガ 沖積地	Matsumoto 2020b
21	マラバンパ2	2039m	ユンガ 丘陵上	Matsumoto 2020b
22	ウィルクパタ	2037m	ユンガ 丘陵上	Matsumoto 2020b
29	コトパタ	1955m	ユンガ 沖積地	Matsumoto 2020b
31	マタマルカ	2197m	ユンガ 斜面上	Matsumoto 2020b
36	ワランパイロマ	1900m	ユンガ 沖積地	Matsumoto 2020b
45	トゥナシルカ	1893m	ユンガ 丘陵上	Matsumoto 2020b
48	ヒルカンエラ	3112m	ケチュア 丘陵上	Matsumoto 2020b
51	ビルカミラフローレス	1998m	ユンガ 丘陵上	Matsumoto 2020b

表 1 中の遺跡のうち、ハンカオ遺跡・ビチャイコト遺跡以外では、各遺跡の出土・表採土器タイプは 1972 年に出版されたコトシュ遺跡の報告書で設定された、表面の色と装飾技法を主な基準とする分類体系 [Onuki 1972] にもとづいて記述されている。筆者らの編年は、器形と文様の分類にもとづいて編年を細分したものであるため、上記の分類体系とは一対

一で対応しない。しかし、ワイラヒルカ期前葉・中葉・後葉という大まかな括りであれば、従来のタイプが新編年のどの時期に対応するかを決定することが可能である。ワイラヒルカ期の代表的な文タイプの新編年での位置付けは以下の通りである（簡略化のためタイプ名冒頭の Wairajirca は省略した）。

前葉：－（無文土器のみのため）

中葉：Shallow Incised

後葉：Red Line Burnished, Black Line Burnished, Zoned Hachure, Fine Line Incised, Broad Line Incised

本研究ではこの対応関係をもとに、ワイラヒルカ期の各遺跡の編年上の位置付けを再検討した。なお、発掘調査が行われた遺跡では、調査で 1 点も関連する資料が得られなかった時期は実際に利用がなかった可能性が高いが、踏査のみが行われた遺跡では、実際には利用があったが表採では資料が得られなかったという可能性も十分に考えられる。そのため、以下では両者を区別してリスト化した。また、遺跡分布の推移の検討のため、前後の時期であるミト期とコトシュ期も含めてリストを作成した。

3-2. 各時期の遺跡分布

表 2 は、これまで調査が行われたワヌコ盆地の各遺跡における各時期の利用の有無を示したものであり、線で区切られた上部が発掘調査が行われた遺跡、下部が踏査により確認された遺跡である。また、図 2 は、これらを地図上にプロットし、ワイラヒルカ期の前葉からコトシュ期までの 4 時期の遺跡分布を示したものである。図 2 中の黒塗り・白塗りの丸印は、それぞれ表 2 中の黒丸と白丸に対応している。

表2 各遺跡の利用時期

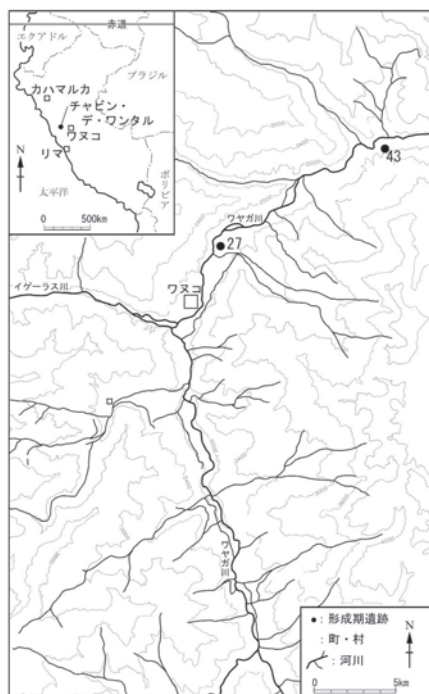
番号	遺跡名	ミト	ワイラヒルカ			コトシュ
			前葉	中葉	後葉	
6	ビチャイコト	-	-	-	●	-
24	コトシュ	●	-	●	●	●
26	シヤコト	●	-	●	●	●
27	ハンカオ	●	●	●	●	●
43	ワイラヒルカ	●	●	●	●	●
44	ピキミナ	-	-	●	●	●
10	シヨンゴイマラン				○	
20	カイワイナ・パハ	(○)			(○)	
21	マラバンバ2				○	
22	ウィルクパタ				○	
29	コトパタ	(○)		○		○
31	マタマルカ				○	
36	ワランパイロマ	(○)			○	○
45	トゥナシルカ				○	
48	ヒルカンエラ			○	○	○
51	ビルカミラフローレス				○	

まず、ワイラヒルカ期前葉の利用が確認できるのは、ハンカオ遺跡 (#27)、ワイラヒルカ遺跡 (#43) の2遺跡である。これらの遺跡ではいずれも発掘調査からワイラヒルカ期前葉の土器が得られている。ただし、この時期には有文土器がなく、踏査データからの時期推定が困難であった。そのため、この時期の遺跡数の少なさは、必ずしも当時期に存在した遺跡そのものの少なさを反映しているとは限らないことには注意が必要である。

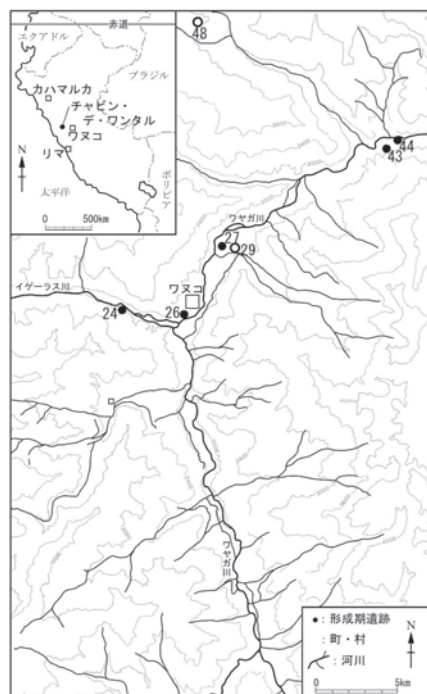
次に、ワイラヒルカ期中葉の利用が確認された遺跡は、コトシュ遺跡 (#24)、シヤコト遺跡 (#26)、ハンカオ遺跡 (#27)、ワイラヒルカ遺跡 (#43)、ピキミナ遺跡 (#44)、

ヒルカンエラ遺跡 (#48)、コトパタ遺跡 (#29) の計7遺跡である。前者6遺跡については、出土・表採資料の図版や写真から当該時期の土器が確認され、コトパタ遺跡についても Wairajirca Shallow Incised のタイプの土器が採集されたことが報告されている。

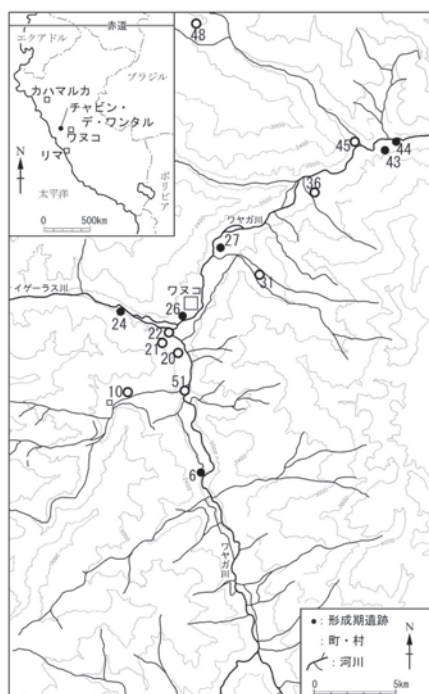
ワイラヒルカ期後葉では、発掘調査から利用が確認されている遺跡は、ビチャイコト遺跡 (#6)、コトシュ遺跡 (#24)、シヤコト遺跡 (#26)、ハンカオ遺跡 (#27)、ワイラヒルカ遺跡 (#43)、ピキミナ遺跡 (#44) の6遺跡である。また、シヨンゴイマラン遺跡 (#10)、マラバンバ2遺跡 (#21)、ウィルクパタ遺跡 (#22)、ワランパイロマ遺跡 (#36)、トゥナシルカ遺跡 (#45)、ヒルカンエラ遺跡 (#48)、ビルカミラフローレス遺跡 (#51) の9遺跡から、ワイラヒルカ期後葉に属する有文土器の存在が図版から確認でき、マタマルカ遺跡 (#31) では Wairajirca Fine-Line Incised のタイプの土器が採集されたことが報告されている。なお、カイワイナ・パハ遺跡 (#20) では、ワイラヒルカ期後葉およびコトシュ期に見られる Wairajirca Red Plain が採集されており、調査者はこれもワイラヒルカ期の遺跡として登録している。



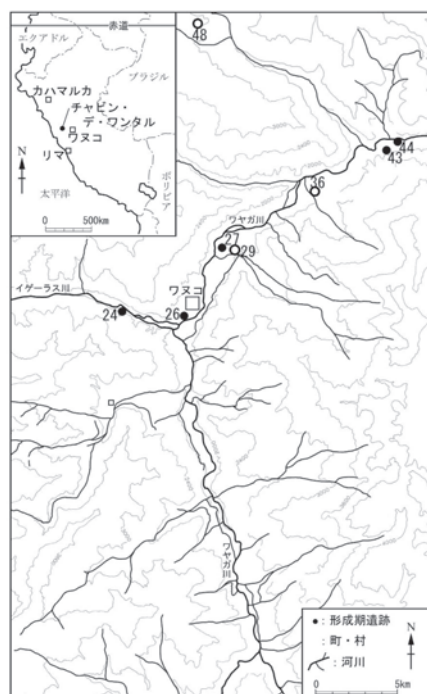
ワイラヒルカ期前葉



ワイラヒルカ期中葉



ワイラヒルカ期後葉



コトシュ期

図2 ワイラヒルカ期からコトシュ期への遺跡分布の推移 [井口ほか 2002:図1 を元図として使用]

最後に、ミト期の遺跡分布について述べておく。これまで、発掘調査でワイラヒルカ期が確認された遺跡では全てその下にミト期の建築が見つかったことから、ミト期の遺跡分布はワイラヒルカ期と一致すると考えられていた〔井口ほか 2002; Onuki 1993, 2014, 2020; 大貫 1998; 松本 2010; Matsumoto 2020b〕^(註1)。しかし、表 2 に示されているように、ビチャイコト遺跡の発掘調査では当遺跡にミト期の利用がないことが明確になった。この事例は、ワイラヒルカ期の遺跡分布をそのままミト期の遺跡分布と同一視するという従来の見方では説明できない遺跡形成パターンが存在したことを示唆している。

現状のデータでは、これまでワイラヒルカ期とされてきた遺跡のうちのいずれがミト期から継続的に利用された遺跡であり、いずれがそうでない遺跡であるかを判断することは困難である。ただし、複数の状況証拠を組み合わせ、予備的な推察を行うことは可能である。判断材料となる項目の一つは、残存する遺跡の規模、特にその人為堆積の深さである。これまで発見されているミト期の遺跡では、石壁でつくられた部屋を丸ごと埋め、その上に新たな部屋を建設するという「神殿更新」を繰り返すために、数メートルの建築遺構の積層が残される傾向にあった。表 2 でミト期から利用がある可能性のある遺跡としてあげた、カイワイナ・バハ遺跡 (#20)、コトパタ遺跡 (#29)、ワランパイロマ遺跡 (#36) はいずれもこの要件を満たしている。また、このうちカイワイナ・バハ遺跡では、実際にミト期の建築と考えられる遺構が観察されている〔Matsumoto 2020b:43-45〕。一方で、ビチャイコト遺跡の事例では、丘陵頂上付近でも母岩の露出が見られるなど層位堆積は概して薄く、発掘調査で確認された最も堆積の深い地点でも深さ 1m 程度であった。勿論、堆積の厚さは「神殿更新」だけが要因となるものではなく、またワイラヒルカ遺跡のようにミト期からの建築の積層があっても残存する層位堆積が 3m に満たない場合もある〔Onuki and Matsumoto 2020 を参照〕。しかしながら、ビチャイコト遺跡のような堆積のごく浅い遺跡と、コトシュ遺跡やハンカオ遺跡に類するような大型のマウンド遺跡とは少なくとも別種の遺跡形成パターンとして区別されるべきものであり、その背景にミト期の建築積層の有無を想定することは妥当な仮説であると考えられる。

また、もう一つの判断材料として、遺構の建材、特に「神殿更新」を行うために必要な多量の土砂へのアクセスが容易かどうかという点を加えることが出来る。ミト期の「神殿更新」では、部屋の内部を丁寧に埋めるために石だけでなく多量の土砂が用いられる〔大貫 1998〕。一方、ビチャイコト遺跡は自然の土壌の堆積自体が極めて薄く、ワイラヒルカ期の基壇建築の建設・建て替えにおいても、基壇内部の充填には土が殆ど用いられず、多量の石が詰められていた。ミト期から利用のある可能性のある遺跡として上で挙げた諸遺跡は、いずれも河川の合流地点付近の沖積地に建設されており、土砂へのアクセスの点でビチャイコト遺跡のような岩がちの丘陵上の遺跡に比べてはるかに適した立地となっている。

以上のようにビチャイコト遺跡の事例は、ワイラヒルカ期の遺跡分布のうち、堆積が浅く周囲に土砂の少ない、丘陵上や斜面部に形成された比較的小規模な遺跡は、ミト期ではなくワイラヒルカ期から利用が開始されたものであるという可能性を示している。現時点では、この可能性をこれ以上検証することは出来ないが、これはミト期とワイラヒルカ期の遺跡分布が全て重なるものとする従来の説に対し、有力な代替仮説となりうる。そこで以下の議論では、以上の内容を作業仮説として従来の議論の前提を再検討し、紀元前二千年紀のセトルメント・パターンの形成プロセスを再考する。

4. 紀元前二千年紀のセトルメント・パターンの形成プロセスの再検討

4-1. 遺跡分布パターンの推移に関する新たな仮説

以上の検討をもとに、ワヌコ盆地の前二千年紀の遺跡分布の通時的変化について考察する。2001年の一般調査を経て、当地域ではミト期からワイラヒルカ期にかけて2つの遺跡グループがあることが確認された。1つは、河川の合流地点付近の沖積地に位置する大型遺跡のグループであり、もうひとつは、河川沿いの丘陵部に位置する小型遺跡のグループである〔井口ほか 2002; 松本 2010; Matsumoto 2020b〕。本研究では、これらの2つのグループがミト期の段階から存在していたのではなく、後者のグループはワイラヒルカ期後葉になって出現したものであるという新たな仮説が提示された。想定される遺跡分布の推移は以下のとおりである。

まず、ミト期に利用されていた遺跡、あるいはその可能性が高い遺跡は、コトシュ遺跡、シヤコト遺跡、ハンカオ遺跡、ワイラヒルカ遺跡、カイワイナ・パシ遺跡、コトパタ遺跡、ワランパイロマ遺跡である。これらの遺跡は、ワイラヒルカ遺跡を除き、全て河川の合流地点付近の沖積地に位置するものであった。ワイラヒルカ期中葉に至るまで、ワヌコ盆地では基本的に、これらのミト期の遺跡があった場所のみ利用が繰り返されていた。この利用は必ずしも連続的なものではなく、ワイラヒルカ期前葉には、この時期まで利用が続いた遺跡と機能を停止した遺跡が見られた^(註2)。一方、ワイラヒルカ期後葉になると、川沿いの丘陵・斜面部に新たに遺跡が見られるようになった。また、それまで遺跡がつくれなかった盆地の南部にも遺跡が分布するようになった。これらの遺跡は、ミト期から続く遺跡と一時期並存するが、比較的短期間のうちに機能を停止した。その後、コトシュ期にはミト期から続く遺跡のみで利用が継続した。

また、この新たな仮説では、ミト期からコトシュ期までの当地域の遺跡分布について、各時期を通じて利用されたのは一部の場所のみであり、その他の遺跡はワイラヒルカ期後葉のみに利用されたものであったものという可能性が提示された。これは、従来の説におけるミト期からワイラヒルカ期まで継続的に利用されていた遺跡がコトシュ期になって半減したという見方とは対照的なものである。

前節で述べたように、以上の仮説は、厚い堆積を持つ大型遺跡と堆積の浅い小型遺跡とを区別し、前者にのみミト期の建築があるという想定を前提としている。また、ワイラヒルカ期の各時期の遺跡の利用の有無については、表採土器のみから判断しており、利用はあったが表採資料では検出されなかったという場合を無視したものととなっている。そのため、ここで単純化して示された遺跡分布パターンとその通時的変化は、今後の調査によって多くの例外が見出されるであろうことが予期される。そこで以下の議論では、このような仮説の導入が、従来の学説に対してどのような新たな見方を加えうるのかという点に焦点を絞って議論を行う。

4-2. 地域のセトルメント・パターンの形成プロセスの再考

上述のような代替仮説を導入することにより、地域のセトルメント・パターンの形成プロセスに関する先行研究の議論を再検討することが可能となる。これまでの議論では、各マウンド遺跡がそれぞれ異なる地域コミュニティまたは政体の中心であると解釈されてきた〔松本 2010:11; Matsumoto 2020b:106-107; Onuki 1993:83, 2014:114; 大貫 1998:74〕。また、2001年の調査で明らかにされた河川の合流地点の大型遺跡と河川沿いの丘陵上の小型遺跡という2つの遺跡グループは、それぞれの遺跡が規模の異なる対等な政体を反映しているものと捉えられ、ミト期からワイラヒルカ期にかけて存在していた小規模な政体群が、コトシュ期になり統合化へ向かったという見方が論じられてきた〔松本 2010; Matsumoto 2020b〕。

今回の結果は、この見方に再考を促す。まず、個々のマウンド遺跡が別個の対等な政体を反映しているという

想定は、それぞれの遺跡がミト期から継続的に機能し、相互に関わり合っていたという理解を前提としていた。しかし今回の研究では、各遺跡が必ずしも同時に機能していたわけではなく、特に上述の 2 つのグループの間では、機能していた期間に大きな差がある可能性が示された。そうであるならば、ワイラヒルカ期後葉にはじめて現れ、短期間で機能を停止したと考えられる丘陵上の小規模な遺跡は、コトシュ遺跡やシヤコト遺跡等のミト期から機能を続けた遺跡群とは異なる機能を有していた可能性を考えなくてはならない。実際、これらの遺跡のうち唯一発掘調査が行われているピチャイコト遺跡では、同時期のコトシュ遺跡やシヤコト遺跡と比べて建築がより簡素であり、出土する土器も、ワイラヒルカ期後葉の中でも限られた時期（ハンカオ遺跡における WJ-IV 期に相当）のものであった。つまり、当遺跡ははじめてから比較的短期間の利用のために建設されたものであると考えられ、ミト期から継続的に利用された大規模遺跡とは異なる機能を有していたことが示唆されるのである。当時期に新たに出現した、ピチャイコト遺跡に類するほかの小規模遺跡も、少なくともその一部においては、継続的な利用とは異なる短期的な利用目的により建設されたものである可能性が高い。本稿ではその具体的な機能差については立ち入らないが、当該時期のこのような状況は、各遺跡が必ずしも全て対等かつ同一機能を持つものであったのではなく、地域システム内で別種の役割を担う存在として遺跡間の相互関係が成立していた可能性を示唆している。

また、このようにワイラヒルカ期後葉の丘陵上の遺跡の出現をこの時期に特有の現象として捉えたと、コトシュ期の遺跡分布状況は、ワイラヒルカ期からコトシュ期への地域集団・政体の変化としてではなく、むしろミト期からの長期的な連続性として理解される。ただし、前節で述べたように各遺跡の利用期間は必ずしも一致するわけではなく、ワイラヒルカ期前・中・後葉という大まかな時期区分においてもいくつかの遺跡では機能が停止していた期間が確認できる。これはさらに細かく見ると、この時期以外にも一世紀を超える利用の中断がそれぞれ異なるタイミングで各遺跡に見られることが近年の調査で明らかになりつつある〔金崎 2021〕。つまりこれらの遺跡は、俯瞰して見れば、類似した立地に千年以上の長期的な利用があったものとして共通しているが、実際にはその利用において様々な相違点が見られるのである。すなわち、前二千年紀のワヌコ盆地のセトルメント・パターンは、このような各遺跡の個別的で多様な歴史によって形成されたものであり、長期にわたる遺跡の利用が続いても、地域社会の中での各遺跡の役割や、遺跡間の関係性は、その時々で様々に異なっていたであろうことを本結果は強く示唆している。

5. 結論

本調査速報では、近年刷新された新たな地域編年をもとに、ワヌコ盆地の紀元前二千年紀の遺跡分布の再検討を行なった。その結果、これまでワイラヒルカ期とされていた遺跡は、ワイラヒルカ期前葉・中葉・後葉の 3 時期に細分され、ミト期の遺跡分布も見直された。また、ミト期からワイラヒルカ期まで各遺跡が長期的・継続的に利用されていたという従来の見方に対し、ミト期から継続的に利用された遺跡グループと、ワイラヒルカ期後葉の短期間の利用のみで機能を停止したグループという 2 つの遺跡グループが存在したという新たな仮説が提示された。さらに、長期的に利用された遺跡でも、その利用は必ずしも継続的ではなく、遺跡により利用期間がそれぞれ異なっていた可能性が示唆された。

本調査のこのような結果は、マウンド遺跡と地域コミュニティや政体を一対一で結びつける従来の見方が、必ずしも常に成り立つわけではないことを示している。各遺跡が地域社会全体の中でどのような役割を果たしていたか、また遺跡間ではどのような関係が成立していたかは、各遺跡の利用の差異に焦点を当てることでは

じめて理解することが可能となる。このような研究においては、各遺跡の利用において生じた多様な時間性をどのようにして明らかにしていくかがまず重要な課題となるだろう。本研究で示したように、高精度な地域編年の構築はその基盤となるものである。

また、本研究で示された知見は、このようなセトルメント・パターンが形成された社会的背景を理解するためには、得られた遺跡分布データを居住集団の分布としてそのまま解釈するのではなく、各遺跡や遺跡の存在する場所が、その時々でどのような社会的意味を持っていたのか、それらの各構成要素はどのように社会的に関係づけられていたのかといった、景観形成の視点からアプローチしていく必要性を示している。本研究では、そのような研究の足がかりとして、表採資料の再解釈にもとづく作業仮説を提案した。今後、当地域の前二千年紀の遺跡利用に関するより広範なデータが得られることにより、更なる研究の展開が可能となるだろう。

【謝辞】

本研究は、東京大学人文社会系研究科に提出された博士論文の一部を加筆修正したものである。博論の執筆にあたっては、指導教官の佐藤宏之先生をはじめ東京大学考古学研究室の先生方にご指導いただいた。放送大学の鶴見英成先生にはワヌコ市での調査において大変お世話になった。東京大学総合研究博物館の大森貴之氏には、年代の解釈についてご助力いただいた。ダニエロ・デパス氏と大谷博則氏には、ビチャイコト遺跡の発掘調査においてご尽力いただいた。また、2名の査読者には大変有益なコメントをいただいた。

最後に、本研究は科研費（21K20038・22H04444・22K13237）による助成を受けて行われた。記して感謝申し上げます。

註

（註1）ただし、「ミト期からワイラヒルカ期にかけて継続的に利用された」と想定される遺跡について、2001年の調査〔井口ほか 2002〕で発見された河川沿いの丘陵上の遺跡グループを含めるかは研究者によって違いがあり、大貫良夫は2014年の論考でこれを含めずにコトシュ遺跡、シヤコト遺跡、ハンカオ遺跡、ワイラヒルカ遺跡、ワランパイロマ遺跡、カイワイナ・パハ遺跡のみをミト期に存在した遺跡として扱っている。

（註2）ワイラヒルカ期前葉については、一部の遺跡のみで先行して土器が利用され、他の遺跡では土器が利用されなかったという可能性も考えられるが、少なくともコトシュ遺跡では土器だけでなくこの時期に相当する年代も得られておらず〔鶴見 私信〕、実際に利用が途絶えていたと考える方が現状のデータに即している。

参照文献

Bonnier, Elisabeth

1997 Preceramic Architecture in the Andes: The Mito Tradition. In *Arquitectura y Civilización En Los Andes Prehispánicos*, edited by E. Bonnier and H. Bischof, pp.120–144, Sociedad Arqueológica Peruano-Alemana, Reiss-Museum Mannheim, Mannheim.

Burger, Richard L., and Lucy Salazar Burger

1980 Ritual and Religion at Huaricoto. *Archaeology* 33(6):26–32.

Depaz, Danilo, Yuko Kanezaki, and Hironori Otani

2020 *Proyecto de Investigación Arqueológica: Vichaycoto, Distrito de Pilcomarca, Provincia de Huánuco, Departamento de Huánuco*. Informe Final Presentado al Ministerio de Cultura, Perú.

井口欣也、大貫良夫、鶴見英成、松本雄一、アルバロ・ルイス

2002 「ペルー、ワヌコ盆地一般調査概報」 『古代アメリカ』 5:69–88。

井口欣也、大貫良夫、鶴見英成、松本雄一、ネリ・マルティル・カスティージョ

2003 「ペルー、サハラバタク遺跡の発掘調査」 『古代アメリカ』 6:35–52。

Izumi, Seiichi, Pedro Cuculiza, and Chiaki Kano

1972 *Excavations at Shillacoto. Huánuco, Peru*. University Museum Bulletin No.3, University of Tokyo Press, Tokyo.

Izumi, Seiichi, and Tosihiko Sono

1963 *Excavations at Kotosh, Peru, 1960*. Kadokawa Publishing Co., Tokyo.

Izumi, Seiichi, and Kazuo Terada

1972 *Excavations at Kotosh, Peru 1963 and 1966*. University of Tokyo Press, Tokyo.

加藤泰健

1998 「アンデス文明の起源を求めて」 『文明の創造力：古代アンデスの神殿と社会』（加藤泰建・関雄二編） pp.7–42、角川書店。

金崎由布子

2021 「南米ペルー、ワヌコ盆地の紀元前二千年紀の社会動態」 東京大学人文社会系研究科提出博士論文。

Kanezaki, Yuko, Takayuki Omori, and Eisei Tsurumi

2021 Emergence and Development of Pottery in the Andean Early Formative Period: New Insights from an Improved Wairajirca Pottery Chronology at the Jancao Site in the Huánuco Region, Peru. *Latin American Antiquity* 32(2):239–254.

Kubler, George

1970 Period, Style and Meaning in Ancient American Art. *New Literary History* 1(2):127–44.

松本雄一

2010 「ペルー、ワヤガ川上流域における形成期の再検討」 『古代アメリカ』 13:1–30。

Matsumoto, Yuichi

2020a A Reconsideration of the Radiocarbon Chronology of the Upper Huallaga Basin. In *Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru*, by Y. Matsumoto, pp.131–48, The Yale Peabody Museum, New Haven.

2020b *Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru*. The Yale Peabody Museum, New Haven.

Matsumoto, Yuichi, and Eisei Tsurumi

2011 Archaeological Investigations at Sajara-patac in the Upper Huallaga Basin, Peru. *Ñawpa Pacha*, 31(1):55–100.

大貫良夫

1998 「交差した手の神殿」 『文明の創造力：古代アンデスの神殿と社会』（加藤泰建・関雄二編） pp.43–94、角川書店。

Onuki, Yoshio

1972 Pottery and Clay Artifacts. In *Excavations at Kotosh, Peru 1963 and 1966*, edited by Seiichi Izumi and Kazuo Terada, pp.177–248, University of Tokyo Press, Tokyo.

- 1993 Las actividades ceremoniales tempranas en la cuenca del alto Huallaga y algunos problemas generales. In *El Mundo Ceremonial Andino*, Senri Ethnological Studies 37, edited by Luis Millones and Yoshio Onuki, pp.69–96, National Museum of Ethnology, Osaka.
- 1999 El Periodo Arcaico en Huánuco y el concepto del Arcaico. *Boletín de Arqueología PUCP* 3:325–333.
- 2014 Una reconsideración de la fase Kotosh Mito. In *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Periodos Arcaico y Formativo*, Senri Ethnological Studies 89, edited by Y. Seki, pp.105–122, National Museum of Ethnology, Osaka.
- 2020 Archaeological Research in the Upper Huallaga Basin in Retrospect. In *Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru*, by Y. Matsumoto, pp.181–189, The Yale Peabody Museum, New Haven.
- Onuki, Yoshio, and Yuichi Matsumoto
- 2020 Excavations at Waira-jirca, 1966. In *Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru*, by Y. Matsumoto, pp.149–162, The Yale Peabody Museum, New Haven.
- Rowe, John Howland
- 1962 Stages and Periods in Archaeological Interpretation. *Southwestern Journal of Anthropology* 18(1):40–54.
- Sayre, Matthew
- 2018 The Historicity of the “Early Horizon”. In *Constructions of Time and History in the Pre-Columbian Andes*, edited by E. Swenson and A. P. Roddick, pp.44–64, University Press of Colorado, Colorado.
- Tsurumi, Eisei
- 2008 La secuencia cronológica de los centros ceremoniales de La Pampa de Las Hamacas y Tembladera, valle medio de Jequetepeque. *Boletín de Arqueología PUCP* 12:141–169.
- Tsurumi, Eisei, Kinya Inokuchi, Yoshio Onuki, Nelly Castillo Martel, and Yuichi Matsumoto.
- 2020 Excavations at Piquimina. In *Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru* by Y. Matsumoto, pp.169–180, The Yale Peabody Museum, New Haven.
- 鶴見英成、セサル・サラ
- 2016 「コトシュ遺跡の測量と形成期早期の神殿研究の展望」 『古代アメリカ』 19:35–46。

原稿受領日 2022 年 4 月 8 日

原稿採択決定日 2022 年 6 月 15 日

